

サッカーにおけるディフェンシブゾーンへのパスに関する報告 —2010 FIFA ワールドカップ 南アフリカ大会—

岩 本 哲 也

1. はじめに

サッカーは固定される事なく常に発展と進歩を繰り返し続け、4年に一度開催される FIFA WORLD CUP は、現代サッカーの姿を映し出す。

日本サッカー協会^{2) 3)} は、特定の大会等から、その大会のサッカーの特徴、トレンドとしてのサッカーの発展傾向、技術・戦術上の特徴、課題、今後に向けた目標への提言を行っている、すなわちサッカーがどのような方向に向かっていて、それを受けて、今後、何を目指して行くべきかを示すために毎回の世界大会を分析し、その分析結果を短期・中期・長期的課題とし、指導現場へフィードバックし活用している。

前回大会の 2006 FIFA WORLD CUP GermanyTM においては、先制点の重要性をあげており、どのチームも守備組織が洗練されており、一度先制されると逆転は非常に困難で、逆転となった試合は全 64 試合のうち 10 試合のみであったと報告している。また、今大会の 2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICATM では、逆転となった試合は全 64 試合のうち 4 試合にとどまり、決勝トーナメントにおいては、スペインは失点ゼロで優勝していることが報告されている。

2. 研究小史

ヒューズ⁵⁾ は、サッカーには、ボールを奪われない様に安全にパスを繋ぎながら、ゆっくりと攻撃を組み立てていくポゼッション・サッカー (Possession Football) があるとしている。これは、ボールを持っていないチームは得点できないのだから、

ボールを長くキープしているチームの方が、得点できる確率が高いという考えである。しかし、連続パスを繰り返しても、味方同士でパスを繋ぎながら攻撃を組み立てる時間が長くなればなる程、守備側は、守備の組織を立て直す事が可能である。だからと言って、ボールを相手ペナルティーエリア付近に蹴るという、キック・アンド・ラッシュ戦略の方が良いという事にはならない。ポゼッション・プレーとキック・アンド・ラッシュ戦術の両方のバランスがとれてこそ成功するとしている。

田中⁷⁾らによると、得点を奪うには、攻撃の速さが大きなポイントを占めており、無駄なパスやドリブルを極力少なくし、シュートレンジに少ない手数でボールを運ぶことが重要であるとしている。

また、日本サッカー協会³⁾の報告によると、2002年のFIFA WORLD CUPでは、「15秒以内の勝負」としてカウンターアタックが際立っていた。しかし、2006年では、ボールの出所を抑え、リスク管理をしっかりとて、カウンターをさせないディフェンスが敷かれた。もちろん、どのチームも一瞬の隙を突くサッカーが展開されたものの、強固な守備が上回ったと報告されている。

岩本⁸⁾は、2006年FIFA WORLD CUPの自陣ペナルティーエリア付近におけるディフェンスプレーヤーの傾向について分析した。その結果、ディフェンスプレーヤーの集結するゴール前エリアでのボール奪取と合わせオフェンスプレーヤーを外に追い込み、ボールを奪取することが失点の減少に結びつく要因であると報告している。

これらの報告から、サッカーにおいて攻撃は、相手の強固な守備ブロックに捕まらないために、ボールを奪った瞬間に1タッチ、2タッチで素早くシュートレンジまで手数をかけずに運ぶことで決定的なチャンスをつくり出すことが重要であり、一方守備では、個々の守備能力を基本としながらもボールを奪うための強固な守備組織を形成し、チーム全体でボールを奪い返す積極的な守備が重要であると言える。

3. 研究目的

サッカーは、試合中に得点を多く奪ったチームを勝ちとするゲーム¹⁾であり、逆に如何に失点をしないかということが勝利に結びつくとも考えることも出来る。

瀧井⁶⁾は、すべてのディフェンス側プレーヤーは、攻撃側プレーヤーが仕事を

するスペースを規制しなければならないとしている。守備の第一の目的は、ゴールを守ることである。したがって、守備の最終的な段階は、ペナルティーエリア内あるいは、その周辺ということになる。すなわち、得点の90%以上のシュートが放たれるバイタルエリアにおける守備が重要であるとしている。

ヒューズ⁵⁾は、ボールを失った時にチームがコンパクトであれば、効果的な守備戦略に直ちに切り替えることができ、コンパクトな形を保っていれば、相手側が効果的な攻撃を始めることを大変難しくすると報告している。

そこで本研究では、得点に結びつきやすいゴールエリア付近において、ディフェンスプレイヤーが組織として意図的にボールを奪うことが、失点の減少に結びつくと考え、2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICATMの決勝トーナメント16試合を分析し、サッカーの指導の現場におけるディフェンスプレイヤーへの指導に有用な資料を得ることを目的とした。

4. 研究方法

1) 分析対象

2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICATM (決勝トーナメント全16試合)

2) 記録方法

2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICATMの開催期間中(2010年6月11日?2010年7月11日)に衛星放送で配信された国際映像をDVD-Rに録画し、分析項目に従ってデータを抽出した。抽出した場面を繰り返し再生しながら、記録用紙にデータを記録した。

3) 分析項目

- a) 時間帯
- b) オフェンス側にパスを出させたエリア
- c) 侵入させたエリア

4) 分析における定義

a) オフェンス側にパスを出させたエリア

ピッチ分割図(図1)M～Sにおいて、オフェンス側がパスを行った場合とした。

b) 侵入させたエリア

ピッチ分割図 A?L においてオフェンス側に侵入させた場合とした。

c) オフェンス側・ディフェンス側

本研究では、オフェンス側エリア（ピッチ分割図 M-S）からパスを行ったチームをオフェンス側とし、パスに対応し、ディフェンス側エリア（ピッチ分割図 A-L）においてボール処理を行ったチームをディフェンス側とした。

d) オフサイド・ファール

ディフェンス側プレーヤーがボール処理を行う際に、オフサイドになったものと、ボール処理を行う際にオフェンス側プレーヤーのチャージにより、レフェリーがフリーキック等にしたものはカウントを行わないものとした。

e) ボール処理

ディフェンス側プレーヤーがボール処理を行う際に、静止した状態ではなく、動的な動作を行っているものとした。

f) 攻守の関係

ディフェンシブゾーン以外からパスを出したチームをオフェンス側とし、ディフェンシブゾーンでボールに先に触れたチームをディフェンス側とした。

5) 統計処理

決勝トーナメント進出チーム上位 8 チームと下位 8 チームの平均値の差の比較には、対応のない T 検定を用いた。いずれの検定も有意水準は 5% 未満とした。

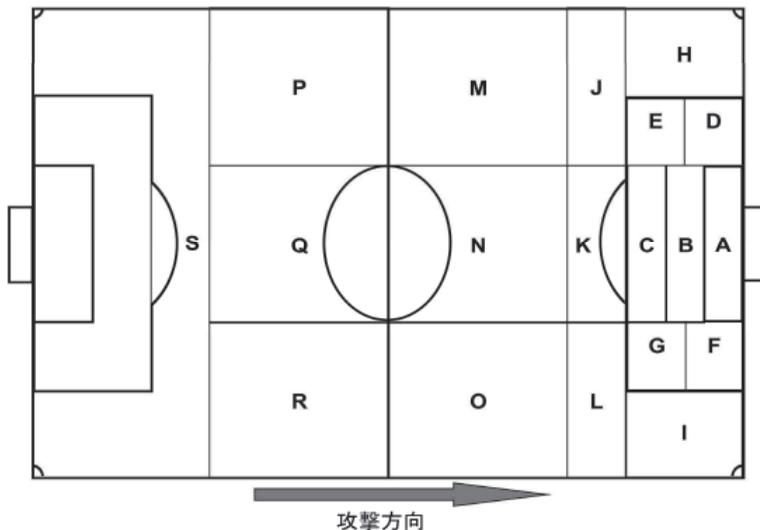


図 1. エリアの分割

5. 結果

1) 決勝トーナメント 16 試合とチーム内の比較

決勝トーナメント 16 試合を対象とし、決勝トーナメント全体と決勝トーナメントに進出した 16 チームを上位 8 チーム、下位 8 チームの 2 群に分け、各分析項目について比較を行った。

表 1 および図 2 には、決勝トーナメント全試合と上位 8 チームおよび下位 8 チームの、オフェンス側にパスを出させたエリアについて示した。決勝トーナメント進出チーム全体では、エリア M からのパスが 113 回 (21.6%)、エリア N からのパスが 115 回 (22.0%)、エリア O からのパスが 119 回 (22.8%) と高い値を示した。上位 8 チームは、エリア M からのパスが 104 回 (22.4%)、エリア N からのパスが 106 回 (22.8%)、エリア O からのパスが 109 回 (23.4%) と高い値を示した。下位 8 チームは、エリア R からのパスが 11 回 (19.3%)、エリア S からのパスが 10 回 (17.5%) と高い値を示した。

表 2 および図 3 には、上位 8 チームおよび下位 8 チームのオフェンス側にパス

を出させたエリアの平均値の比較を示した。上位8チームおよび下位8チームともにエリアM、エリアN、エリアOが高い値を示した。しかし、上位8チームと下位8チーム間に有意な差は認められなかった。

表3および図4には、侵入させたエリアの平均値の比較を示した。エリアKへの侵入は、上位8チームは114回(23.9%)、下位8チームは19回(27.7%)とそれぞれ高い値を示した。また、エリアJへの侵入も、上位8チームが81回(18.6%)、下位8チームが12回(16.5%)とそれぞれ高い値を示した。エリアLへの侵入は、上位8チームが78回(18.7%)、下位8チームは12回(13.6%)とそれぞれ高い値を示した。しかし、上位8チームと下位8チーム間に有意な差は認められなかった。

表1. 決勝トーナメント進出チームにおけるオフェンス側にパスを出させたエリア

出させたエリア(回数)	M	N	O	P	Q	R	S	合計
決勝トーナメント全体	113	115	119	37	27	65	46	522
上位8チーム	104	106	109	32	24	54	36	465
下位8チーム	9	9	10	5	3	11	10	57

出させたエリア(%)	M	N	O	P	Q	R	S	合計
決勝トーナメント全体	21.6	22.0	22.8	7.1	5.2	12.5	8.8	100.0
上位8チーム	22.4	22.8	23.4	6.9	5.2	11.6	7.7	100.0
下位8チーム	15.8	15.8	17.5	8.8	5.3	19.3	17.5	100.0

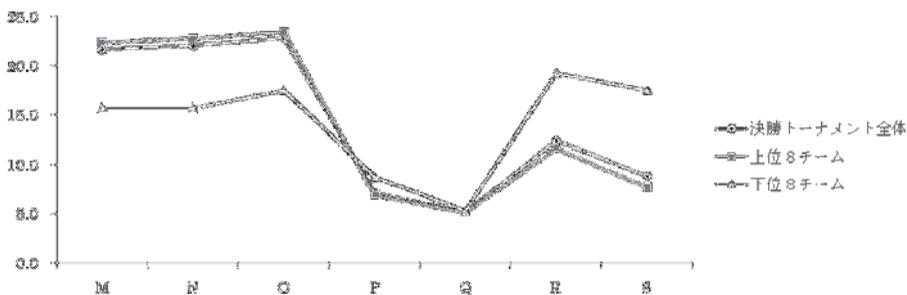


図2. 決勝トーナメント進出チームにおけるオフェンス側にパスを出させたエリア

サッカーにおけるディフェンシブゾーンへのパスに関する報告

表 2. 決勝トーナメント進出チームにおけるオフENS側に出させたエリア (平均値の比較)

出させたエリア (%)	M	N	O	P	Q	R	S	合計
スペイン	16.9	20.0	20.0	10.8	4.6	13.8	13.8	100.0
オランダ	26.7	21.1	28.9	5.6	1.1	11.1	5.6	100.0
ドイツ	21.8	30.8	24.4	9.0	6.4	7.7	0.0	100.0
ウルグアイ	21.1	23.3	20.0	6.7	5.6	15.6	7.8	100.0
ガーナ	22.5	12.5	20.0	7.5	7.5	10.0	20.0	100.0
パラグアイ	14.8	22.2	25.9	0.0	18.5	14.8	3.7	100.0
アルゼンチン	31.4	31.4	14.3	2.9	0.0	11.4	8.6	100.0
ブラジル	25.0	17.9	28.6	10.7	3.6	7.1	7.1	100.0
上位 8 チーム平均	22.5	22.4	22.8	6.6	5.9	11.4	8.3	
標準偏差	5.3	6.3	5.1	3.8	5.7	3.1	6.2	

出させたエリア (%)	M	N	O	P	Q	R	S	合計
チリ	27.3	0.0	27.3	9.1	9.1	9.1	18.2	100.0
韓国	25.0	25.0	25.0	16.7	0.0	8.3	0.0	100.0
スロバキア	20.0	10.0	10.0	30.0	0.0	10.0	20.0	100.0
アメリカ	20.0	30.0	20.0	0.0	0.0	20.0	10.0	100.0
ポルトガル	0.0	33.3	0.0	0.0	33.3	33.3	0.0	100.0
イングランド	27.3	9.1	18.2	9.1	9.1	9.1	18.2	100.0
日本	9.1	18.2	18.2	0.0	9.1	36.4	9.1	100.0
メキシコ	8.3	8.3	25.0	8.3	0.0	16.7	33.3	100.0
下位 8 チーム平均	17.1	16.7	18.0	9.1	7.6	17.9	13.6	
標準偏差	10.1	11.8	9.1	10.3	11.3	11.3	11.2	

p-value	0.202	0.252	0.212	0.527	0.716	0.144	0.262
---------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------

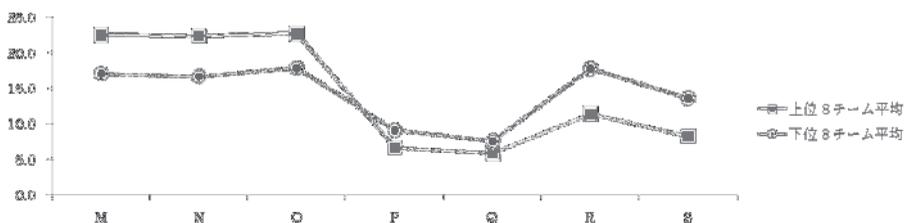


図 3. 決勝トーナメント進出チームにおけるオフENS側に出させたエリア (平均値の比較)

表 3. 決勝トーナメント進出チームにおける侵入させたエリア

侵入させたエリア(回数)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	合計
上位 8 チーム	30	27	41	12	8	6	15	13	29	81	114	78	454
下位 8 チーム	3	5	6	1	10	2	3	3	4	12	19	12	80

侵入させたエリア(%)	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	合計
上位 8 チーム	7.1	6.2	9.1	2.3	1.6	1.0	3.9	2.6	5.0	18.6	23.9	18.7	100.0
下位 8 チーム	3.5	5.5	7.0	1.1	11.5	2.2	3.5	3.4	4.4	16.5	27.7	13.6	100.0

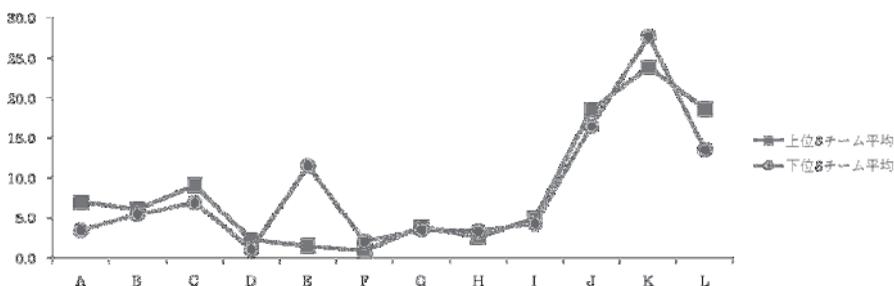


図 4. 決勝トーナメント進出チームにおける侵入させたエリア

6. 考 察

前回大会の 2006 FIFA World Cup GermanyTM) においては、下位 8 チームでは、中央エリア N からのパスが多く、上位 8 チームでは、サイドのエリア M や、エリア O からのパスを出させる割合が高く、上位 8 チームは、オフenseプレーヤーをサイドのスペースに追い込みボールを奪うという姿勢であり、下位 8 チームは、中央エリアに追い込みボールを奪っていた。

しかし、今大会の 2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICATM では、有意な差は認められなかったが、上位 8 チームと下位 8 チーム共にサイドのエリア M とエリア O および中央エリア N からパスを出させる割合が高かった。

これは、サイドのスペースか中央のエリアなのかを制限することなく、幅広いエリアにおいて、オフenseプレーヤーにパスを出させていたものと考えられる。

サッカーにおけるディフェンシブゾーンへのパスに関する報告

また、侵入させたエリアでは、上位 8 チームと下位 8 チーム共に中央エリア K に最も多く侵入させており、ディフェンスプレイヤーの最も集結する中央エリアに追い込みボールを奪っていたと考えられる。

このことから、決勝トーナメントに進出したチームは、ディフェンシブゾーンでボールを奪う際、オフenseプレイヤーにサイドのスペースと中央エリアという幅広いエリアにおいてディフェンスを行うことで、ボールの出所を限定し、ディフェンスプレイヤーの最も集結するバイタルエリア付近（本研究におけるエリア K）においてボールを奪っていたと考えられる。

ヒューズ⁵⁾は、チームがフィールド一杯に広がると、選手間や選手の背後に大きなスペースができ、効果的に相手にプレッシャーをかけたり、味方をサポートしたりすることが困難になるとしている。

また、日本サッカー協会⁴⁾は、単に強固な守備ブロックを形成するのではなく、どこに形成するかが次の攻撃への狙いになっており、時には背後のスペースを消して「ボールを奪う守備」から「ゴールを守る守備」へシフトしなければならないときもあるとしている。

従って、本研究においては、自陣ペナルティーエリア付近において、エリア M およびエリア O のサイドのエリアとエリア N の中央エリアにおいて、オフense側に制限をかけ、ディフェンス側は、バイタルエリアに集結し、ボールを奪うことが失点を減少される要因であると考えられた。

7. 総括

本研究では、2010 FIFA WORLD CUP SOUTH AFRICA? の決勝トーナメント 16 試合を対象にディフェンスプレイヤーのプレー傾向を分析し、サッカーの指導の現場におけるディフェンスプレイヤーへの指導に有用な資料を得ることを目的とした。その結果、以下の知見が得られた。

- 1) 今大会においてベスト 8 に進出したチームと決勝トーナメント 1 回戦で敗退したチームの比較では、オフense側にパスを出させたエリアにおいて、有意

な差は認められなかった。しかし、タッチラインからタッチラインに及ぶ幅広いエリアにおいて、ディフェンスプレーヤーが、オフenseプレーヤーに制限を加えることが、ボールを奪う要因であることが示唆された。

- 2) ディフェンシブゾーンに侵入させる場合は、バイタルエリアへ侵入させることが多い傾向にあった。このことから、サッカーにおいて最も危険なバイタルエリアでのボール奪取は必須条件であると言える。

以上のことから本研究では、ディフェンスプレーヤーは、幅広いエリアにおいてオフenseプレーヤーに制限を加え、バイタルエリアに狙いを定め、意図的にボール奪うことが失点を減らす要因であることが示唆された。

引用・参考文献

- 1) 日本サッカー協会 (2005) Laws of the Game 2005/2006:33 (財) 日本サッカー協会
- 2) 日本サッカー協会 (2006) FIFA World Cup GermanyTM JFA テクニカルレポート. (財) 日本サッカー協会
- 3) 日本サッカー協会 (2008) UEFA EURO 2008TM JFA テクニカルレポート. (財) 日本サッカー協会
- 4) 日本サッカー協会 (2010) Technical news Vol.39:50-52
- 5) Charles Hughes. 辻浅夫. 京極昌三訳 (1996) SOCCER THE WINNING FORMULA SOCCER SKILLS AND TACTICS
- 6) 瀧井敏郎 (1995) ワールドサッカー戦術. ベースボールマガジン社 :40-41
- 7) 田中佳孝. 秋田浩一 (1984) サッカーに於ける“速攻的攻撃”の意義. 駒澤大学保健体育部研究紀要 第6号 :73-78
- 8) 岩本哲也 (2010) サッカーにおけるディフェンスプレーヤーの判断基準の検討—ディフェンシブゾーンへのパスに着目して—. 駒澤大学総合教育研究部紀要 第四号 :387-444